

国勸業博覧会の様子なども詳述されている。しかし、眼鏡産業が当時、政府の期待に応えるまでに至らなかつた経緯にもふれられている。

江戸から明治に至る広告を通してみる眼鏡店や、ステータス・シンボルとしての眼鏡の用いられ方を外人画家たちが漫画などで画いた資料も興味深い。

本書は、資料による社会史的視野からみた眼鏡の発達史で、文章も平易で読みやすい。著者のきめ細かい研究のご苦労に敬意を表するとともに、是非、多くの方々に御一読をおすすめしたい。

(斎藤 仁男)

〔ダイヤモンド社、一九九〇年、A五判、一一三頁、定価三、二〇〇円〕

### 三浦豊彦著

#### 『暉峻義等——労働科学を創った男——』

著者は労働衛生史では多数の研究を発表されている。この分野でのベテランであることは周知のことであり、現に「労働衛生史学会」の創立者であり、この方面での資料のまとめ役でもある。その著者が長く勤務し、指導も受けた暉峻所長の一生を紹介したものであるから、単なる資料としても貴重なものであることは言うまでもない。

私も戦時中から労研に勤めていたので、暉峻所長の風貌には接

していたが、余り話をすることもなくその生い立ちなども知らなかつた。なお労研内では所員は所長にも先生とか所長とかの敬称で呼ばずに、「さん」だけで呼んでいた。三浦さんはある日、既に所長を辞めておられる、所長に長時間の面接をしてその生い立ちを『労働の科学』に寄せたことがある。多くの所員はこれで暉峻所長の生い立ちを漠然とでなく、かなり詳細に知つたわけであつた。

それほどに暉峻さんの一生は複雑さをもっている。そのため理解し難いところも多いのである。そのため暉峻所長はある人からは、労働者の搾取に手を借した人であるときめつけられ、他の多くの人からは労働者のために働いた科学者であると賞賛されているということになつていく。

このような複雑すぎる暉峻所長の解明にはその生い立ち、その研究態度、研究の蓄積、研究の見通しなどについて、詳しい客観的な発掘が必要になる。このためにこの三浦さんの書いた本は非常によい資料であることは間違いない。この意味で労働科学や労働問題に関心を持たれる方々に、この本を読まれることを推薦しないわけには行かない。

また、次の意味で暉峻所長の一生の研究は、暉峻所長時代に生れた良心的な科学者の生き方にその内面の葛藤を比較して当時の風潮を知るうえによい資料を提供するものと思われる。暉峻所長が生れたのは一八八九年で、七月には東海道線が新橋から神戸まで開通している。七高を卒業した一九一〇年は幸徳秋水の事件が発生した年である。東大医学部を卒業した翌年一九一八年には米

騒動が発生し、その翌年には神戸の造船所や陸軍の砲兵工廠にストライキが起こった。

暉峻所長の青春の時代は日本が揺れ動いた時代であった。このなかで暉峻所長のころも揺れ動いたのであろう。そのうえに医学を学んだということは、これをさらにアクセルしたに違いない。というのは暉峻所長は医学の中では生理学にもっとも興味を持ったように、労働者の労働条件の問題も生理学によって解決しようと考えておられたらしいが、生理学の思想には、全身の細胞が一つの生命の目的に強く協力するという、将来、全体主義思想に発展する思想の芽がある。このために昭和反動期には生理学の橋田教授が戦争協力の責任を感じて服毒するというようになるのだが、暉峻所長は医学としては生理学に心酔している反面、現実の問題として衛生学(当時の衛生学の主流は細菌学であった)それも社会衛生学の実践的な面に飛び込んだということであった。この二つの相反する葛藤に悩みながら世の動きに流されたというのが、暉峻所長の現実ではないかと私は思っているのであるが、この本はこのような私の考えに一層自信を持たせて頂けたことを感謝するわけであった。これが私の至らない読後感であった。この時代はいろいろな風格の人が輩出した、暉峻所長はその最たる人であらう。

(高木 和男)

〔リプロボート社発行、一九九一年、B六判、三〇三頁、定価一五四五円〕

### 富士川英郎著『富士川游』

待望久しかった『富士川游』が今回公やけになり、欣喜雀躍し、また安堵の胸をなでおろした者の一人として、この感想文を書きました。

昭和二十九年出版の『富士川游先生』の第一部を執筆された富士川英郎氏が戦後の混乱期の中で、游先生の弟子とも言うべき故三枝博音氏とともに編取されたのには、それ相応の内部事情が察せられるのですが、時代が時代だけに何かと制約があり、後日完結を期せられているやに聞いていたところでありました。

その間、手元の多数の資料を整理され、また発掘された新しい資料につき検討を加えられた上で、第一部の原作に肉づけされ、今日の人に読み易く、認識を深め易くされるため、その後三十年の歳月をかけて心労を重ねられた事を想像するとき、凡庸のよくするところでなく、感心する外ありません。

游先生が医学の分野に於て刻まれた足跡が丹念な史実によって裏打され、何等の粉飾なく記述されている本書は後世に残る良書と評しても過言ではありません。

游先生を探究せんとする後進の医師にとつて、必読の入門書として紙価を高めるのではないだろうかと思ひます。

翻つて昭和五十年、地元から游先生顕彰の声が澎湃として起り、日本医学学会の協賛を得て、顕彰会が大々的に発足した当初、偉大な先生の顕彰が地元主導の形で遂行する事は是非、事業の成功